様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０７６０

研究課題名（和文）中世叡尊教団の全国的展開

研究課題名（英文）The Developement of the Eizon's Order in Japan in the Middle Ages

研究代表者
松尾　剛次（MATSUO, Kenji）

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：３０１４３０７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、奈良西大寺叡尊をいわば祖師とする中世叡尊教団の展開を明らかにした。従来、叡尊らは戒律復興を行った旧仏教者として位置づけられ、教団を形成していたことすら忘れられてきた。本研究によって、一三世紀以来、一五世紀半ばまでは全国に教団を展開していたことが明らかとなった。とりわけ、叡尊・忍性以後、備後浄土寺定証、極楽寺順忍、俊海といった、第二、第三の叡尊、忍性が出現し、非人救済、女人救済といった活動が継承されていた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to clarify the development of Eizon's order in the medieval Japan. The aim of this research is to clarify the development of Eizon's order in the medieval Japan. The main result is as follows; Eizon's order developed in all Japan from 13th century to 15th century.
Eizon died in 1290 and after his death, there were lots of great diciples who sucssed Eizon's salvational ctivities. The successors of Eizon had continued the salvation of lepers and female people.

研究分野：日本史

キーワード：叡尊教団　西大寺末寺　叡尊　忍性　非人救済　女人救済　個人救済　尼寺

１．研究開始当初の背景

本研究が対象とする叡尊教団（奈良西大寺叡尊をいわば開祖とする教団については、旧仏教の改革派として位置づけられ、ともすれば等閑に付されてきた。その結果、叡尊・忍性に研究が集中し、彼らが教団を形成していたことすら忘れられ、叡尊らの死後の１３世紀末には急速に勢力を失ったと考えられてきた。

ところが、私が「再発見」した１５世紀半ばの西大寺末寺帳によって、その頃までは全国に末寺を保持していたことは確実となった。

２．研究の目的

本研究は、叡尊教団の全国的な展開を明らかにし、その実態を明らかにすることにある。いわば、叡尊以後の弟子達に注目し、叡尊教団の面としての広がりに光を当てる。

というのも、叡尊没後も、西大寺信空、鎌倉極楽寺順忍、備後浄土寺定証といった弟子達によって社会救済活動は継続していたからである。いわば、第２、第３の叡尊らが出現していたのである。

３．研究の方法

叡尊は 1500 箇寺の末寺を形成したといわれる。本研究では、明徳２（1391）年に書き改められた西大寺末寺帳や、１５世紀半ばの末寺帳などを使って、末寺の地理的な位置を確定し、現地調査を行った。それによって、各末寺の西大寺末寺となった過程と律僧の活動を追った。また、現地調査によって、従来、看過されてきた叡尊教団による文書や文化財を見いだし、それらによって、叡尊教団の実態に迫った。

４．研究成果

本研究の成果として、著書２、論文２があるが、成果をまとめた 2 著書の内容を紹介する。『中世叡尊教団の全国的展開』は、本研究の中間報告書で、三部立てになっている。第一部第一章は律僧に注目して仏教者の社会活動に注目して中世仏教を見直したもので、本書の総論部分にあたる。叡尊教団は、一三～一四世紀に日本全国で非人救済活動、寺社修造、港湾・河川・道路の維持管理などの社会活動を行っていた。本書は、そうした活動を史料に即して河内、美濃、尾張、越中、九州などに所在した末寺に注目して具体的に明らかにしている。第一部第二章では、日本において病気がいかに考えられてきたのかを、古代から近世まで通じて論じた。とりわけ、癩病は重要で、叡尊らとの関わりに注目している。

第二部第一章と第二章では、河内国における叡尊教団に注目した。河内国は、叡尊教団の拠点である大和国に近く、末寺数が多いこともあって、二章に亘って論じた。とりわけ、真福寺末寺化を通じて鋳物師集団と叡尊教団との関係に光りが当てられた。第三章では、紀伊国における叡尊教団の展開を五輪塔などにも注目しつつ論じてみた。第四章ではベルギーの新ルーバン大学で見出した小松寺旧蔵大般若経などを使って美濃国における叡尊教団の展開を論じた。第五章では、尾張国における展開を論じた。第六章では「光明真言過去帳」などの見直しなどから越中国における叡尊教団の展開を見直した。

第三部は、九州地域に注目して叡尊教団の展開を見てみた。第一章では筑前国に、第二章では筑後国に注目した。とりわけ、筑後浄土寺の分析を通じて、もう一つの中世西大寺末寺帳を新たに見いだせたのは収穫であった。第三章では肥前・肥後両国における展開を論じた。第四章では、「光明真言過去帳」などの見直しなどを通じて叡尊教団の豊後・豊前国における展開を論じた。第五章では、五輪塔などにも注目して叡尊教団の薩摩国・日向国・大隅国への展開を見た。 以上のように第三部では五章に亘って九州地域の叡尊教団の展開を見た。九州地方では、仁治元（一二四〇）年に中興（律寺化）がなされた豊後国分寺を皮切りに叡尊教団の展開が開始された。寛元年間（一二四三－四七）になると豊前大興善寺の中興がなされている。すなわち、本州に最も近い地点から叡尊教団の九州進出は開始されたといえる。こうした九州地方での叡尊教団の展開において、宝治二（一二四八）年春に忍性らが九州へやってきたのは画期となったと推測される。宝治二年春に、忍性は隆信房定舜らが中国よりも齎した律三大部を取りに九州へ下った。六月二二日に定舜は帰朝し、忍性は先に律三大部一八セットを先に西大寺に運び、八月四日に西大寺へ帰った。定舜は律三大部二セットを自ら所持して一〇月八日に帰着した。忍性らは、定舜らが中国よりもたらした律三大部を取りにきたのであるが、それは豊前・豊後での成功を踏まえ、さらに大乗寺などの博多での展開の起爆剤となったと推測される。第二の画期は、蒙古襲来であろう。肥前東妙寺を初め、蒙古襲来退散の祈祷のために律寺が形成された事例も多かったであろう。史料が少なく仮説に止まるが、一三世紀末に中興された律寺は蒙古襲来退散の祈祷のためであろう。ところで、叡尊教団寺院の立地を見ると、港、河口、川の側に所在したものが多い。内陸部の丘の中腹に所在する寺院ももともと川の近くに所在したものもある。たとえば豊後金剛宝戒寺は大分川のほとりに位置したが、度々の洪水もあって、大友氏により丘の中腹へ移転している。その地理的位置からも博多大乗寺、筑後浄土寺、日向宝満寺、薩摩泰平寺、豊前宝光明寺、越中禅興寺のように、港・川を管理していたと考えられる。とりわけ、豊前宝光明寺は駅館川の河口に位置し、駅館川を殺生禁断権を梃子に支配していたことなどを史料

的に裏付けることができる点で注目される。

また、西大寺末寺の末寺数については、叡尊の時代に一五〇〇箇寺の末寺があったと言われるが、はっきりしていなかった。しかし、明徳二（一三九一）年に書き改められた「西大寺末寺帳」（「明徳末寺帳」）によれば、西大寺が直轄する直末寺二一八箇寺が記載されている。その数は僧寺のみで、尼寺は含まれていない。また、三河以東（東国）については、鎌倉極楽寺の管轄下にあったので書かれていない。それゆえ、東国分を考えれば、少なくとも四〇〇箇寺くらいの直末寺が所在したのではないかと推測される。

とりわけ、律宗の尼寺はより注目されるべきである。九州における叡尊教団寺院の分析からも、肥前東妙寺には妙法尼寺が、肥後浄光寺には妙性尼寺がペアの尼寺として存在したように、数多くの尼寺が存在した。しかしながら、「明徳末寺帳」には、そうした尼寺が記載されていない。

また、筑前国で第四位のランクの田村神宮寺が七箇寺の末寺があったように、「明徳末寺帳」記載の直末寺には多くの孫末寺が所属していたと考えられる。それゆえ、叡尊時代に一五〇〇箇寺であったにしても、それ以後、数倍の末寺を有していたのかもしれない。以上のように、叡尊教団の優勢ぶりは九州末寺の展開からも十分考えられるのである。

また、注目されるのは、「明徳末寺帳」記載の寺院には、数多くの鎌倉幕府祈祷所、室町幕府の利生塔寺院が含まれる点である。すなわち、鎌倉将軍家、室町将軍家の祈祷を担当する寺院で、その寺格の面でも重要視されていた。湯之上隆「関東祈祷寺の成立と分布」（『九州史学』六四、一九七八、後に湯之上『日本中世の政治権力と仏教』思文閣出版、二〇〇二に採録）では七四箇寺（幕府資料により確実なもの）の将軍家祈祷寺があがっている。その四二箇寺が律宗寺院で、そのほとんどは叡尊教団の寺院である。それらは、尼寺を除けば「明徳末寺帳」に見える直末寺であり、それらの寺格の高さがわかる。

さらに、叡尊教団の展開が一五世紀半ばまでは確認される点である。従来は、西大寺末寺の展開は「明徳末寺帳」を主に使って行われてきたために、一四世紀末以降は叡尊教団は衰頽していったイメージがあった。しかし、第三部で紹介した、一四五三年から一四五七年にかけて作成された「西大寺末寺帳」では二八六箇寺が記載されているように、少なくとも西国においては、一五世紀半ばまでは末寺を維持していた。新たな直末寺化にも成功している。たとえば、豊後国では神宮寺が新たに加わっているほどである。それゆえ、叡尊教団は一五世紀半ばまでは勢力を保持していたと考えられる。

拙著『続中世叡尊教団の全国的展開』は、前著の続編で、前著で扱えなかった畿内・北陸・関東地域、中国・四国地方を扱ったが、いわば本研究の最終報告書である。また、研究期間内に著書の他に二つの論文も著したが、その成果をも本書に取り入れられたので、それらの内容紹介は略す。

『続中世叡尊教団の全国的展開』も三部構成である。第一部で、まず、鎌倉新仏教教団として叡尊教団の律僧（尼）たちを位置づけた。また、関東祈祷所とも表記される鎌倉将軍家祈祷所を分析し、一三世紀後期の蒙古襲来の危機以後は、五〇箇寺を越える律寺が関東祈祷所化していたことを明らかにした。従来の鎌倉新仏教論では、鎌倉新仏教の特徴として民衆救済宗教という考えがあり、親鸞等が典型とされたために、将軍家との関係は等閑にふされた感がある。しかし、叡尊教団ほかの律寺（禅寺も）は、個人救済を第一義としながらも将軍家祈祷（鎮護国家の祈祷）も行っていたのである。さらに第一部では、叡尊教団関係者の物故者名簿といえる「光明真言過去帳」の紹介と分析を行った。第二部では畿内・北陸・関東地域の、第三部では、中国・四国地方へ叡尊教団の展開を明らかにしようとしている。以上のような構成を有する本書だが、本書によって明らかになった主要な事柄をまとめる。

（一） 叡尊教団の実態について

第一部では、の叡尊教団について官僧と遁世僧という概念を使って、「鎌倉新仏教」のもう一つの典型として位置づけた。しかし、従来は、ともすれば叡尊・忍性のみが注目され、叡尊教団の存在については十分な光が当てられてこなかった。松尾著『中世律宗と死の文化』（吉川弘文館、二〇一〇）、『中世叡尊教団の全国的展開』（法藏館、二〇一七）と本書によって、叡尊教団の全体像が面として明確になったと考える。

（二）「光明真言過去帳」の信頼性

「光明真言過去帳」については、その信頼性に疑問がなかったわけではない。とりわけ備後浄土寺の寺伝では一三二七年に死去したとされる浄土寺開山定証が一三〇七年になくなった僧のところに記載されていた点などは「光明真言過去帳」の信頼性に疑問を抱かせるせるものであった。ところが、第三部で論じたように定証は一三〇七

年には亡くなっていることは確実であり、「光明真言過去帳」の信頼度が大いに高まったといえる。

（三）直末寺と私相伝の寺

別著『勧進と破戒の中世史』（吉川弘文館、一九九五）で述べたように、西大寺末寺には二種類の末寺があった。直末寺と私相伝寺の二つである。直末寺は、西大寺がその寺の住持職（長老ともいう）任命権を有する末寺のことで、いわば直轄寺院である。他方、私相伝寺は、西大寺系の僧が長老であるが、その任命権は寺の開基の一族などが把握している寺院のことである。たとえば、近江石津寺は古代以来の寺院で、とりわけ藤原家代々の墳墓所であった。一四世紀末頃の別当兵部阿闍梨は不法を行い、怠けもので、妻子を蓄え、寺領を売却し、修造を行わないために、堂舎は衰微し、追善供養も行えないような状態であった。そこで、藤原直親は、明徳二（一三九一）年に別当を追放し、石津寺を律院とした。その際、舅甥で、西大寺門弟佐々木慈恩寺長老興算の弟子であった祐算を招いて、石津寺の興行を行った。ここに石津寺は西大寺系の私相伝の寺院となった。その後、石津寺は応永二〇（一四一三）年八月一〇日に西大寺直末寺となった。このように、西大寺系の私相伝寺院から西大寺直末寺の過程が明確になった。

（四）叡尊教団の研究を進めてみると、律僧たちの活動が全国的な広がりをもって行われていたことが注目される。そのことは永享八（一四三六）年の「坊々寄宿末寺帳」などによって、全国から毎年、西大寺光明真言会に律僧が集合し、交流していたことからも想像される。ことに、第三部などで明らかにしたように、西大寺僧実行房実専は、備中国成羽高梁川の開削に協力して成功させたが、後に、彼は和泉国久米田寺による日根野荘の開発を依頼されるほどであった。

（五）律寺化を支えた地方有力商人や武士

叡尊教団の全国的な展開を具体的に跡づけてみると、律寺化の過程が明らかとなった。

その際、まず注目されるのは後援者として地方有力商人や武士の存在である。

備後浄土寺は、定証が、永仁六年（一二九八）年に鎮西（九州）に布教のために、航海の都合で尾道浦にしばらく逗留したことに始まったが、定証の後援者の中心人物は、尾道浦の浦人（豪商カ）で有力者の光阿弥陀仏であった。

また、近江慈恩寺は、室町幕府の有力者で、近江の有力者あった佐々木氏頼によって建立されたように、地方武士が律寺の後援者となっていた。丹後金剛心院を後援した松田氏、紀伊利生護国寺を後援した隅田氏など地方武士を後援者とする律寺も多い。

律寺というと、北条氏と結びついたイメージが強いが、当初は地方武士が建立した寺院が、後に将軍家祈祷寺に指定されるなどして、北条氏との関係を深めていったのであろう。

（六）律寺による地方荘園の管理

さらに注目されるのは、律寺による地方荘園の管理機能がある。越後曼荼羅寺は越後佐味庄の管理を本寺である西大寺から委ねられていた。また、丹後泉源寺も西大寺丹後国志楽庄の管理を任されていた。こうしたケースは各地であったのだろう。

律僧が庄園の管理などに関わったケースは西大寺のみならず興福寺、高野山など他の諸大寺の場合にそうであった。たとえば、越前大善寺は、興福寺領河口庄の政所を務めているし、備後今高野金剛寺は高野山領太田庄の庄園管理に携わっていた。戒律護持を標榜し、廉直さで知られる律僧たちは、庄園管理を任されたのである。

（七）諸国国分寺復興の担い手としての律

僧

蒙古襲来退散祈祷を契機として、諸国一宮・国分寺の中興が国策となり、一九箇国の国分寺が奈良西大寺と鎌倉極楽寺に委ねられたことはよく知られている。本書第三部で論じたが、おそらく、一三世紀末には律寺として再興された伯耆国分寺のように、その内のいくつかの国分寺には叡尊・忍性らによって、それ以前に弟子が派遣され、律寺化が始まっていたのであろう。その中興を支援したのは、国衙の責任者である国司以下の在庁官人であった。

ところで、従来は、国分寺と叡尊教団との関係といえば、一五世紀以降において関係を維持していたのは伊与、周防、長門の三国分寺のみと考えられてきた。しかし、これらの他にも、伯耆・因幡国分寺は確実に西大寺末寺であった。その他、尾張国分寺、加賀国分寺、越中国分寺、丹後国分寺、讃岐国分寺、陸奥国分寺の国分寺も西大寺末寺であった。それゆえ、諸国国分寺の六分の一が西大寺末寺として一五世紀半ばにおいても機能していたことは注目すべきことである。

（八） 鎌倉極楽寺流の展開

本書第二部で見たように、鎌倉極楽寺とその末寺群が東国のみならず西国にも展開していた。とりわけ、極楽寺第三代長老善願房順忍、第四代長老本性房俊海の時代には、極楽寺流と呼ぶべき程の末寺展開をしていた。

これまで、ともすれば西大寺とその末寺群は西大寺流と呼ばれることが多かったが、それでは極楽寺流（極楽寺とその末寺群）の独自な展開は捉えることができない。私は、叡尊教団という呼称を使って、西大寺流と極楽寺流の両方の動向を掴もうとしているが、叡尊教団という表記の有効性が言えよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

（１）松尾剛次「中世叡尊教団の伯耆・因幡・出雲・石見四国における展開～国分寺等に注目して～」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第 19 号、2018 年 3 月 pp61-76

（２）松尾剛次「鎌倉極楽寺流の成立と展開～初代から九代までの極楽寺歴代往持に注目して～」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要第 14 号』』2017 年 9 月 pp1-20

〔学会発表〕（計　件）

〔図書〕（計　２件）

（１）松尾剛次『続中世叡尊教団の全国的展開』（法藏館、2018）出版予定

（２）松尾剛次『中世叡尊教団の全国的展開』（法藏館、2017）pp1-538

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松尾剛次（ MATSUO Kenji ）
山形大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：30143077

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)